

後日談の時間

神鳥ガルーダ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

梶ヶ丘中学を卒業して7年。

茅野カエデこと雪村あかりは初恋の相手であり、それ以来の想い人、潮田渚と久しぶりにふたりきりで会う約束をしていた。

この作品はpixivにも投稿しています。

目次

茅野カエデの事情	1
出会い、告白	3
プロポーズ、引退	12
過去の思い出、結婚	21
潮田あかりのその後	31

茅野カエデの事情

私の名前は雪村あかり。

小さい頃『磨瀬榛名』ませはるなという名で子役をしていて、現在、同名で女優業に復帰し売り出し中。

そして、私にはもう一つ名前がある。

『茅野カエデ』

中学3年生の時、正体を隠す為に名乗った偽名。

でも、皆からそう呼ばれている内にすっかり気に入って、中学3年のクラスメイトたちからは今もそう呼ばれている。

理由は、お姉ちゃんを殺した（と思い込んでいた）超生物『殺せんせー』を殺す為、あの人に正体がバレない様にする為。

お姉ちゃんの仇を討つ為なら自分がどうなっても構わず、『触手』を移植し、茅野カエデを演じて殺せんせーを殺す機会を待っていた。

でも半年以上、殺せんせーと付き合っただけで疑問が生じた。

この人が本当にお姉ちゃんを殺したの？

私の知らない別の事情があるのかもしれない。

殺意に自信が持てなくなった私は、殺す前に真相を確かめるべきなんじゃないかと思った。

でも、移植した『触手』に宿った殺意はそれを許さず、私は暴走し、殺せんせーを殺しにかかった。

そんな私を殺せんせーは救ってくれた。

殺せんせーは自分を殺そうとした私を命を賭けて助けてくれた。

殺せんせーからお姉ちゃんの死の真相を聞き、私は復讐から解放された。

そして、殺せんせーと共に私を救ってくれたもう1人の恩人『潮田渚』。

渚は私にとって初恋の相手だ。

最初は、クラスで席が隣で初めて仲良くなった友達だと思っていた。だけど一緒に過している内に、私は渚を異性として好きになってい

た。

移植した『触手』の痛みに耐えている時は気付かなかったけど、暴走した私の殺意を弱める為に……その……キ……キス……された……時に……気付いちちゃった。

私は渚の事が好きなんだって…。

それから私は渚の友達『役』を演じていた。

最も、渚以外の人たちには気付かれていたけど…。

バレンタインの時にチョコを渡そうとした時、私は渚を好きになった理由に気付いた。

私は真っ直ぐ目標ターゲットに向かっていている渚の顔を好きになったんだという事。

お姉ちゃんと復讐を無くした私が空っぽにならずに済んだのは渚のお陰。

渚が復讐に狂って暴走した“私”を殺してくれて、私の心を満たしてくれたから。

だから、殺せんせーみたいな教師せんせいになるという渚の目標に余所見をさせちゃいけないと思って、今まで友達『役』を演じてきた。

あの殺意渦巻く暗殺教室から約7年。

明日、渚と会う約束をしている。

そして、友達『役』を演じる最後となる日だった。

出合い、告白

渚にとって茅野は最も親しい女子と言えた。

初めて会った時、渚に自分とお揃いという事でツイントールを教え
てくれ、その事で長い髪を気にならなくなった。

E組では席も隣だし、杉野とカルマ以外、そして女子の中で唯一、名
前を呼び捨てで呼んでいる数少ない存在。

だから、「全部演技」という言葉を否定し、『触手』によって暴走し、
死の手前まで行った茅野を止める事に尽力した。

中学を卒業し、別々の進路を進んだ二人だったが、それでも月に2、
3度は会っていたし、夏休みなどの長期休暇の際は頻繁に会って遊ん
でいた。

…カルマや中村なども一緒だったが…。

高校を卒業し、茅野が芸能界に復帰した後は流石にあう機会も減つ
たが、それでも大学の講義が無い日と茅野のオフの日が重なればよく
会っていた。

そして、今日もそういう日だ。

渚は大学卒業後、教員免許を取得し、教育委員会の教員採用試験に
合格したので、この春から公立高校に教師として赴任する事が決定し
ている。

中学3年から目指してきた夢の第一歩を踏み出した渚に、茅野がお
祝いをしたいと言ってきたので会う事になったのだ。

実は数日後に、E組のみんなと大学卒業の祝いで集まるのだが、茅
野はスケジュールの関係で参加できないので、一足先にお祝いしたい
との事だった。

売れっ子女優である茅野ならば、高級レストランでディナーという
選択も出来たが、一介の大学卒業生に過ぎない渚にとって、あまり格
式の高いレストランでは楽しめないだろうから、どこか適当な居酒屋
で食事しようという事になった。

「ここなんかどうかな渚？」

「……居酒屋あずさ…か。ここじんまりしていいね。二人だけだしここ

でいいよ」

そう言つて二人で店に入った。

「いらつしや……いい……ま……せ……う？」

「……えっ!？」

店に入ると、高校生くらいの少女が元気に対応してくれたが、途中から声が小さく途切れていった。

渚と茅野も絶句して少女を見つめた。

彼女の容姿は渚とそっくりだったのだ。

パッとみればまるで姉妹……もとい兄妹の様によく似ていた。

「ねえ渚。この子渚の親戚？」

「いや、親戚にもここまで僕に似ている子はいないよ……」

少女はジーっと渚を見て、思いついた様に言ってきた。

「……もしかして……タコさんの生徒さん？」

「……!？」

渚と茅野は再度、驚いた。

「タコさん」、「生徒さん」……このキーワードから察するに、目の前の少女は殺せんせーの事を知っている。

勿論、国家機密だった殺せんせーの事は中学卒業前に全世界に公表された。

殺せんせーを追い詰め、確実に殺す為に……。

世間一般の殺せんせーの評価は「地球を滅ぼす危険性の高い超生物」だ。

渚たち3―Eの生徒たちの証言など誰も信じず、彼らは洗脳された……という扱いだつた。

しかし、目の前の少女の顔を見れば、彼女は殺せんせーに好意的な反応だつた。

「……殺せんせーは、一時期あの店の常連だつたんだね……」

渚たちは蛍という名の少女から、あの時の冬休みに起こつた事を聞いた。

殺せんせーの真実を知り、暗殺の事についてクラス全員が悩んでいた時だ。

あの時は自分たちが真剣に悩んでブルーだった時に、殺せんせーは遊べない事に悩んでいたかと思っていたが、それだけじゃなかったらしい。

蛍には内緒で母親の梓から当時の事を聞くことが出来た。

あの時、梓は脳腫瘍を患い、その影響で盲目になり、長くてあと3年の命だった。

小学生の蛍の為に、殺せんせーを殺して報奨金の三百億を得ようと暗殺を決行したが、殺せんせーには最初から見抜かれ、他の殺し屋同様「手入れ」を受けた。

その手入れとは、梓の脳腫瘍の除去手術。

命が助かり、視力も回復した。

「タコさんは私たち母娘の恩人。だからあの時の報道でタコさんの事を悪く言っていたけど、私は信じられなかった」

梓の病気や暗殺の事を知らなかった蛍だったが常連として来ていた殺せんせーと面識があっただけに、あの時テレビ放送で殺せんせーと渚たちが悪く言われていても、納得していなかった。

その事実が嬉しかった。

あの時、自分たちと殺せんせーの事を何も知らない癖に、自分たちに哀れんでいた連中にE組全員が不快感を持っていた。

でも、自分たち以外にも殺せんせーの事を知っていて、認めてくれている人がいた事が何よりも嬉しかった。

「…料理も美味しかったし、これからもあの店に行こうかな」

「…それってもしかして蛍ちゃんが目当て？」

からかうような笑顔で…だが目は笑っていない…茅野が問う。

「な……なんでそうなるの？」

自分そっくりな少女にそんな感情を抱くなどというナルシスト趣味は渚にはない。

自己評価が低いのは中学時代から変わらず、彼女いない歴11年齢が続いているのだ。

★★★

「渚は明日の予定はどうなの？」

「明日は午後から実家に戻るよ」

大学生になってから、1人暮らしをしていた渚だが、両親の為に月に一度は実家に戻っていた。

かつてはヒステリーを起こし、渚の事を自分のリプレイとしていた母、そんな母に恐怖し離れていった父。

離れ離れになった家族だが、殺せんせーのおかげで今では関係は良好になった。

「茅野は？」

「私は明後日までオフよ。昨日まで朝ドラの最終回のロケだったから」

「そうか……「とんぼ」ももうすぐ最終回か」

芸能界に復帰し、その天才的演技、ももとの身体能力の高さに鳥間から指導されたフリーランニングにより、30mの崖から笑顔で飛び降りれるスタントマン不要のアクション、中学時代「茅野力エデ」として培ったモノが、彼女を若手ナンバーワンの女優にし、朝の連続テレビ小説「とんぼ」の主演に抜擢されていた。

「ねえ渚……まだ時間ある？」

時間は19:00:大学生にとってまだ帰宅時間とはいえない。

「終電にはまだ時間もあるし、実家に帰る準備は済ませているから大丈夫だけど……」

「じゃあ、大事な話があるの……。もう少し付き合って……」

茅野が渚を伴ってやって来たのは、殺せんせーを殺した報酬で皆で買った柵ヶ丘中学校旧校舎だった。

茅野は鍵を取り出すと、施錠されていた扉を開ける。

「鍵……持ってたの？」

「うん。磯貝くんにスペアキーを借りた」

中に入っていく、一年間殺せんせーと過した教室の前で立ち止ま

る。

「…。」

教室の中に入るとばかり思っていたのに、扉の前で立ち止まった茅野に渚は訝しむ。

茅野は渚の方に向き合うが、そのまま下を向いて俯いた。

すでに日が暮れて暗くなっているので、渚には判別できないが、その顔は紅潮している。

その心臓はドキドキと動悸が激しくなっていた。

友達『役』を終わらせる。

それは、この7年間秘めていた想いを告白する事だった。

『進路』^{まえ}に向かって進む渚に脇見させたくなかったからあの時、この場所で想いを告げるのを止めた。

そして今、夢の第一歩を踏み出した渚に改めて告白する。

受け入れてくれれば友達から恋人に、断られれば友達に…どちらに転んでも友達『役』は終わる。

しかし、いざこの時になつて心臓がバクバク高鳴り、なかなか言葉にならない。

女優業に復帰して4年。

お芝居での恋愛なら勉強したとおりに演じればそれらしく見せる事はできたが、現実^{リアル}の恋はままならない。

でも、渚が夢の第一歩を踏み出したのだから、これからは“応援”ではなく傍で“支え”たい。

「な…：渚…！」

「…どうしたの茅野？」

「…わ…：私…：渚が…：渚が好き！友達じゃなく…：異性として！！」

今まで芝居の中で行ってきたのとは対照的な拙い告白…。

でも、人生で最も真剣な告白…。

目を強く瞑りながら渚からの返答を待つ。

しかし、一分、二分と経っても渚からの返答がない。

バタツという音が聞こえ、瞑った目を開けて見ると…：湯気が出そ

うな程顔を真っ赤にさせ硬直し、卒倒している渚の姿が見えた。

「…渚あ?」

茅野は慌てて渚を助け起し、教室に運び込んだ。

椅子に座らせ、持っていたペットボトルのミネラルウォーターを飲ませ、何とか落ち着いていた渚に茅野は苦笑していた。

渚は美少年と言える容姿であるため、学生時代も人気があった。

しかし、童顔低身長である為それはマスコットの可愛いモノであり、大抵は年上のお姉さんとごく一部に「こんなに可愛いのに女の子筈が無い」という男の娘に対する特殊な趣味を持つ男子に好意を寄せられていただけである。

そんな渚であり、自己評価が低く恋愛の対象になるとは思っていなかった為、茅野の突然の告白に動揺しフリーズしてしまったのだ。

「…もう大丈夫…」

水を飲んで何とか落ち着いていた渚は茅野に真意を聞いた。

「最初にあった時は、隣の席で話しやすかったから友達になった…と思ってたけど、いつの間にか渚を好きになっていった。殺せんせーへの殺意と移植した『触手』の痛みを抑えるので必死で気付いていなかったけど…でも、あの時の事ではっきりと自覚したんだ…」

「…あの時って?」

「それは聞かないで!」

「…ごめん。じゃあずっと…僕の事を…」

茅野は黙って頷く。

「何で今まで…」

何故この7年間、黙っていたのか。

その理由を聞き、渚はさらに真っ赤になった。

「殺せんせーのような教師になる」という夢を応援するため、渚に脇見をさせない為に7年間想いを秘めて友達『役』を演じてくれていた。渚にとって茅野は、カルマや杉野と同じ親友という位置づけだった。

女子の中では一番の親友。

でも、茅野は自分に恋愛感情を抱いていた。

今まで気づかなかった自分が腹立たしい。

何より、茅野の健気な気持ちを知って、渚の心臓は打ち抜かれた。客観的に見て可愛い女子とは思っていたけど、今はとても愛おしかった。

「本当に僕でいいの？こんなチビで今でも中学生や女の子に間違われる僕なんかで…茅野なら…ビッグな女優になった茅野なら、僕なんかよりももっとカッコいい男の方が…」

「そんなの関係ない。渚が渚だから、私は渚がいいの。ううん…渚以外、どんな男の人でも嫌!!」

自己評価が低く、男としての自信がない渚は自分と売れっ子女優である茅野とは釣り合わないと思っているが、茅野はそれを否定する。女優としてどんな演技もこなしているが、やりたくない演技もある。それはキスシーン。

復帰後もキスシーンのある役は避けていた。

「とんぼ」も恋愛要素は低いドラマなので、キスシーンはなかった。女優としてはある意味失格なのかも知れないが、例え演技でも渚以外とキスなんてしたくなかった。

「…僕って馬鹿だよな。そんな茅野の気持ちに今まで気づかなかったなんて…」

流石の渚もここまで来れば、自分の鈍感さが嫌になった。

「…一応、気付かれない様にしていたんだけどね」

最も他の演技はともかく渚への好意を隠すのは不得手で、渚以外のE組メンバーにはほぼ全員に気付かれていたが…。

「…僕で良かったら喜んで…茅野と恋人になりたいよ」

渚の答えを聞き、茅野はゆっくりと渚に抱きついた。

「ありがと…嬉しいよ…渚…」

ゆっくりと目を閉じて唇を合わせる。

渚と茅野の二度目の接吻は、とても甘く暖かった。

☆☆☆

翌朝。

朝日の光で目が覚めた茅野：いや、あかりは隣にいる渚に気が付いた。

「…そっか。昨夜は渚の部屋に泊まったんだった…」

お互い一糸も纏わぬ姿で、夜にベッドを共にする。

つまりは、そういう事だ。

「まさか…告白してその日にこうなるなんてね…」

顔を真っ赤にしながら昨夜の事を思い出す。

あの後、旧校舎を出て、渚が一人暮らしをしているアパートの部屋に行き、そのまま一晩明かした。

自分でも急展開だと思わなくもないが、後悔はない。

今まで守り通した純潔を渚に捧げる事が出来て、嬉しかった。

横でまだ眠っている渚の頬に軽く口付けすると、下着を付けて台所に向かった。

目が覚めた渚は、いい匂いがしてきたのでベッドから起きて台所に向かった。

「あっおはよう渚！」

「うん。おはよう茅…^{かや}じゃなく、『あかり』…」

そこには朝食を作っているあかりの姿があった。

恋人になって、渚の彼女の呼び方が『茅野』から『あかり』に変わった。

E組関係者で彼女の名前を本名のファーストネームで呼ぶのは渚だけになった。

「…って御飯作ってくれたの」

「うん。トーストとハムエッグだけど…」

「ありがとう。美味しそうだね」

あかりの作ってくれた朝食を取り、午前中を2人で過ごす。

特に特別なことをするのではなく、ソファに座ってテレビを見て、ときおり見つめあい、口付けをする。

そんな甘い時間を越し午後になり、渚は予定通り実家に戻り、あか

りも帰っていくだった。
渚とあかりの恋人としての付き合いは始まったばかり…。

プロポーズ、引退

渚とあかりが付き合い始めた事を知り、元3―Eのメンバーたちは素直に祝福した。

あかりが渚に想いを寄せている事は、副担任の烏間先生以外クラス全員が気付いており、「ようやくくつついたか!」というのが全員の感想だった。

カルマは連絡を受けてすぐに：中村も留学を終え帰国したその翌日に、渚とあかりの仲を冷かしに行くほど、2人の仲の事はクラス全員が気に掛けていた。

2人が交際を始めてから、様々な事があった。

新任教師の渚の赴任先は教育実習先であった「市立極楽高校」。

渚の授業は生徒たちに評判が良かった事から、極楽高校の校長が手を回し、強引に渚を赴任させた。

全校生徒の9割9分9厘、不良学生で構成されている男子校であり、全学年が学級崩壊を起こしている教育困難校である。

そんな中、去年の渚が教育実習を受け持ったクラスだけが、ある程度まともになったという実績があった。

赴任した当初、外見は弱そうで威厳というモノがない渚は、最初の頃は生徒たちから完全に舐められ、殺せんせーのようには流石にいかなかったモノの、渚なりに生徒と全力で接し、やがて生徒たちの心を掴んでいった。

そんな渚に触発されたのか、生徒たちに課題だけ出して放置していた他の教員たちも次第に生徒たちと真剣に向き合うようになり、極楽高校は、渚が生まれる前の1980年代に放送された「荒廃した学校に闘いを挑んだ熱血教師」の実話を元にドラマ化した『ス●ール☆○オーズ』の様に立ち直っていった。

高校で担任を務める渚と、女優業で忙しいあかりは、中々顔を会わす機会がなかったが、LINEや電話は欠かさず行っており、なんとか時間を作り、逢瀬を重ねていった。

一度は、渚が女優『磨瀬榛名』と知り合いであるという事を嗅ぎ付けた生徒たちが渚についてきて、2人きりの時間を台無しにされそうになった事もあったが……。

渚が極楽高校に赴任してもうすぐ3年になり、渚が1年目から受け持った生徒たちも今年度立派に卒業する。

忙しさのピークも過ぎ、お互い時間が空いた為、久しぶりに2人きりのデートを楽しんだ。

帰る前に景色のよい所で寛いでいる時、渚があかりに話をふった。

「何、渚？」

今日のデートにおいて、渚の様子が少しおかしかったのをあかりは感じていた。

デートそのモノは楽しんでいたが、なにやら緊張している様に感じられたのだ。

「…実は僕、今年度で極楽高校を辞める事になったんだ」

「えっ?!教師を辞めるの?」

「いや、高校を辞めるだけで、教師としての仕事は辞めないよ」

「…で、事は転任ってわけでもないのね…」

転任なら辞めるとは言わないだろう。

「実はね。前々から浅野先生から声を掛けられていてね」

「…浅野先生って、桐ヶ丘学園の前理事長のこと?」

浅野學峯。

桐ヶ丘学園の創設者で前・理事長。

渚たちが在学時は、彼らE組にとって最も脅威だった存在である。教育者として殺せんせーと似た者同士であり、描いていた理想も似ていたが、やり方が違った為対立したが、後にお互いを認め合った殺せんせーの教師としての好敵手。

E組にとつてはある意味「ラスボス」的存在だったが、渚は學峯の事を殺せんせーや烏間先生と同じくらい尊敬している。

殺せんせーの事が公おあやけになり、生徒を危険に晒したとして柵ヶ丘学園は糾弾され、學峯は学園の経営権を手放さなければならなかった。

しかし、教育に対する信念が折れない人なので、退任後、浅野塾という私塾を開校し、新たな教育活動を行っている。

學峯が1人で経営、事務、講師を兼任しているおり、現在は上手く回っているが、その辣腕振りのせいも、色々と事業の話が舞い込み流石に1人では手が回らなくなってきたらしい。

渚が極楽高校に赴任してからしばらくして、學峯は渚のところへ赴き、浅野塾で教鞭を執る様スカウトに来たのだ。

「僕が受け持った生徒たちは今年で卒業するからね…それに前にあかりが僕に勧めてきた事があつたでしょう」

それはあかりが漠然と渚に話した事だった。

以前、磯貝が自分たちが買い取った旧校舎を有効活用したいと意見を出した時、あかりは渚にこの校舎を使ってもらいたいと思った。

あかりに言われて、渚もその事を考える様になった。

殺せんせーが自分たちを教えた校舎で、今度は自分がそこで教鞭を執る。

やってみたいと思った。

そこで、學峯の下に赴き、私塾経営のノウハウを勉強しようと考える様になり、學峯のスカウトを受けたのだった。

「…そっか。頑張ってね渚」

渚の殺せんせーの様な教師になるという目的の新たな一歩。

でも、それが今日、緊張していた原因とは思えない。

他に何かあるのかと、渚の方を見たら、渚の顔がかなり赤くなっていた。

ここまで赤くなるのは、あかりが渚に告白した時以来ではないだろうか？

「…そ…それでね。だからというわけじゃないんだけど…あ…あかりにこれを受け取って欲しいんだ…」

渚が懐から取り出したそれは小さな箱——指輪ケースだった。
あかりの心臓が高鳴った。

恋人から送られる指輪……その意味とは……!?

「け……結婚しよう……」

期待した通りの言葉が渚から出てきた。

あかりの告白から交際を始めてから3年。

プロポーズは自分の方からしようと渚は決めていた。

女優であるあかりはそう簡単に結婚できないだろうし、渚も職場が代わるので、ごたごたするだろうから直ぐには出来ないだろうけれど、あかりと共に人生を歩みたいという気持ちは抑えられない。

しかし、あかりは涙を流しながら微笑んで頷いた。

あかりからすれば、渚との結婚は何よりも喜ばしい事だ。

確かにお互い立場もあるし、いろいろとごたごたするだろうが、渚と結婚できるのなら、『殺る気』になればそんな事は乗り越えられる。

それが、暗殺教室で学んだ事だから……。

「嬉しいよ渚。これからずっと、一緒に生きて行こう」

あかりの返答を聞き、渚はケースから取り出した指輪をあかりの左薬指に填めた。

それほど高価なモノではないが、教師の安月給ではかなり無理をしたのだろう。

あかりにしてみれば、渚から貰った婚約指輪ならば一番安いモノでも良かったのだが、自分のために頑張ってくれた事は素直に嬉しかった。

渚の首に腕を回し、口づけする。

渚は身長の高さを気にしているが、あかりからすればそんな事は気にならない。

むしろ渚と目線が合わせやすいので、むしろ良いとすら思っていた。

★★★

渚とあかりは婚約を機に、それぞれの親に挨拶に行った。

あかりの母は既に逝去しており、姉であるめぐりが半分母親代わり

だった。

そのあぐりも亡くなり、今は父一人子一人である。

初めてあかりの父に会う事になる渚は緊張でビクビクしていた。

あかりの父親は雪村製薬の代表取締役であるので、ただの一教師に過ぎない渚との結婚に反対されるかも知れないからだ。

しかし、予想に反してあかりの父は、特に反対しなかった。

「渚君。私が君に望むのはただ一つ。決してあかりを不幸にしないで欲しい」と、いう事だけだ」

あかりの父は、あかりの結婚相手は本人に決めさせる。

余程、変な人物でもない限り、反対しない。

と、決めていたようだ。

その原因は、長女あぐりの件だ。

雪村製薬は一時期、経営破綻に陥り民事再生手続きを申請し、それを受けたのが柳沢誇太郎という男だった。

彼は、援助の条件として長女あぐりとの結婚を求めてきた。

有名バイオ企業の御曹司であり、天才科学者として名も馳せていた彼の経歴を見て、良縁と思いあぐりに話を持ちかけた。

妹のあかりは、この結婚に内心では反対していたし、あぐり自身も本心では望んでいない事も気付いていた。

しかし、会社の責任者として社員たちの生活を守らなければならず、柳沢の援助を断れば、雪村製薬は倒産していただろう。

心優しいあぐりは、父親である自分と会社の社員たちの為に、この結婚を承諾した。

しかし、柳沢と研究していた元部下に後で聞いた話ではとんでもない誤りであった事を知った。

柳沢は仮にも婚約者であるあぐりを「召使い」として扱い、「女」として扱わなかった。

それどころか、研究の為の「捨て石」として利用していた。

社員たちの生活は大事だが、頼る相手は選ばなくてはならなかった。

経歴ではなく人間性を……。

結果、あぐりは20代の若さで亡くなってしまった。
その遠因は間違いなく柳沢にあった。

柳沢の援助で会社は危機を脱したが、その代わり娘が犠牲になったのだ。

だからこそ、せめてあかりだけは、好きな相手と結ばれ幸せになつてもらいたい。

それこそが、母親代わりにあかりの面倒を見てきたあぐりに対する最大の供養になると願う…。

そして、渚の両親。

息子が連れてきた結婚相手が、人気女優『磨瀬榛名』である事を知り、恐縮しまくっていた。

渚からは中3の時の同級生としか聞かされていなかったもので、まさか芸能人とは思ひも寄らなかったようだ。

★★★

市立極楽高校卒業式の日。

渚は生徒たちの卒業を見送り、自らも3年間教鞭を執った職場を後にした。

その一週間後、朝起きてテレビを付けたら、朝の芸能ニュースである事件が放送されていた。

『女優「磨瀬榛名」婚約、引退発表』…と。

「えっ?!引退する?」

あかりから女優を引退する事を知らされた渚は寝耳に水の状態だった。

渚にしてみれば、結婚しても女優を辞めて欲しいと思っていたわけではなかったからだ。

「言ったでしょう。これからは渚の夢を応援するんじゃないやなくて、傍で支えたいって…」

あかりからすれば、女優業よりも渚とのこれからの生活を取るの当然といえた。

「渚の夢の言いだしっぺは私だしね」

いつかあの旧校舎を、渚が教鞭を執る学び舎にする。

その為に渚は浅野前理事長が経営する私塾で講師として務めると共に私塾経営の勉強をする。

しかし、渚1人では難しいだろう。

無論、あの土地の共同地主であるE組の皆も協力してくれるだろうが、渚の妻となる自分が一番支える必要がある。

既にあかりは學峯と面接し、渚と同じく来年度から浅野塾の事務のアルバイトとして雇ってもらえるよう手続きを済ませていた。

「最初はアルバイトとして事務職の勉強と資格を取得してから就職して、渚と一緒に浅野先生に私塾経営の勉強させてもらおうってね」

渚が私塾を開くとき渚が講師をして、あかりが事務を務め、2人で経営していく。

「でも、急に芸能界を引退なんて出来るの？所属事務所との契約だって…」

「その点は心配ないよ」

『殺せんせーのアドバイスブック 茅野カエデ編』に女優業復帰に対する事務所との契約に関してのアドバイスが書いてあった。

殺せんせーは、あかりが渚と結ばれ、芸能界を引退する可能性も視野に入れており、その時事務所とトラブルにならない様に対策を練ってくれていたのだ。

そのアドバイスに従い、子役時代の芸能事務所に復帰した時の契約した時にその事を織り込んでおいたのだ。

「つまり、殺せんせーは僕らが結婚する事を前提にあかりのアドバイスブックを書いたって事？」

変な方向に用意周到なゴシップタコを思い起こし、渚は顔を引き攣らせた。

「渚は、私が女優を辞める事反対？」

「…あかりがそれでいいなら、僕としても嬉しいよ」

いくら結婚しても、売れっ子女優ともなれば、中々時間があわないだろう。

何より温厚な渚とはいえ、お芝居だと割り切つていても、妻が他の男とのラブシーンを見るのは面白くない。

ファンみんなの為の『磨瀬榛名』ではなく、自分だけの『雪村あかり』でいて欲しいと思う。

でも、あかりが女優を続けたいというのなら、それを尊重しなければと思っていたが、あかりは女優業にそれほど未練はなかった様だ。

「きつと殺せんせーもね。「君にあつてる」つて笑つて言つてくれると思うの」

「ありがとう、あかり。一緒に進んで行こう」

スキャンダルらしいスキャンダルのなかつた清純派女優である磨瀬榛名の突然の婚約、そして引退発表に芸能界に激震が起こった。

「まだ若いのに引退は早過ぎる」という声が、芸能関係者やファンたちから当然、出ていた。

また、人気女優の結婚相手である渚に対する中傷が磨瀬榛名のブログやツイッターで眩かれたりしていた。

一般人なので、渚の名前が公表されてないので、渚に直接被害が出ているわけではないが……渚自身も自分が叩かれる事はある程度予想できていたので、基本的にスルーしている。

芸能人の突然の引退は所属事務所はおろか、下手をすれば関係のある各所に損失を与えてしまうため難しいのだが、渚と交際を始めてから徐々に仕事を減らしていき、引退を発表する頃には、どこにも迷惑がかからない様、配慮されていた。

事務所側も、磨瀬榛名が子役のときにレッスンなどでそれなりの金を掛けたが、天才子役だったあかりはその分の元はしっかりと取っており、復帰後も長年のブランクをモノともしない活躍で、事務所の利

益にかなり貢献しており、さらに丁度契約更新の時期であつた事も重なり、強く反対できなかった。

さらに事務所の社長とあかりの父親は旧知の間柄であり、その口添えもあつて、さしたトラブルも無く引退できたのだつた。

「やあ、よく来てくれたね。潮田君に雪村さん」

3月末日。

渚とあかりは、これからの職場となる浅野塾に赴き、浅野學峯塾長に挨拶を交わした。

「よろしくお願ひします、浅野塾長」

「こちらこそよろしく。期待してますよ潮田先生。そして雪村さん」

「はい」

「貴女ならば、今年中にも事務系の資格の殆どを取得できると思いますので、今年の秋ごろにはアルバイトから正式雇用とさせて頂きませう」

「ありがとうございます塾長」

あかりは高校卒業後、女優業に専念しながらも勉強は続けていた。

学ぶ事は演技の幅を広げる事にもなるし、殺せんせーいわく、「第二の刃を持たざる者に暗殺者の資格なし」という教えにも合致している。

「君たちの夢、私も応援させてもらうよ。あの校舎は私の教育の始まりの場所でもある。一時は私の弱さの象徴だった場所だが、教育の原点に立ち返った場所でもある。私と殺せんせーの後を君たちが継いでくれるのを楽しみにさせてもらうよ」

「はい!!」

こうして、渚とあかりは新たな進路を共に進んでいくのだつた。

過去の思い出、結婚

浅野塾。

元・桐ヶ丘学園理事長、浅野學峯が開校した私塾である。束縛から解放された學峯が、静かな教育生活を謳歌している……筈だったのだが…その辣腕ぶりから様々な事業の話が舞い込んで来て、多忙な日々を送っていた。

今まで1人で、経営、事務、講師を行ってきたが、今年から2人のスタッフを雇った。

講師の潮田渚と事務アルバイトの雪村あかりである。

潮田渚は、教育者としての學峯の好敵手ライバルの教え子であり、彼の教えを最も色濃く受け継いだ彼の後継者と言える教師である。

雪村あかりは、渚の婚約者であり、つい先日まで芸能界を賑わした売れっ子女優である。

最も、その事を知るのは婚約者である渚と雇い主の學峯の2人だけである。

あかりは、おろしていた髪を中学の時の様に結び、伊達眼鏡をかけており、その完璧な演技で女優『磨瀬榛名』である事を完全に隠し、塾に通う生徒たちの誰にも気付かれていなかった。

2人は開いた時間に學峯から事務や経営などのノウハウを学んでいるが、休憩時間などは殺せんせーの話で盛り上がった。

殺せんせーの件は守秘義務が適用されているので、中々話題にはし難い。

しかし、學峯も殺せんせーの事を知る当事者の1人である。

學峯が殺せんせーと最後に会話したのは2月14日、バレンタイン・デーの夜に旧校舎の職員室で茶を飲みながら語り合った時だった。

「あの時に思いました。私が上から学園を支配し、雪村先生と殺せんせーが下から生徒たちを支えるのが私の真の理想の教育だったのだと…」

學峯は渚たちの殺せんせーとの思い出話をよく聞いてくれた。

彼が殺せんせーやE組と拘ったのは、鷹岡の件を除けば本校舎との対決時のみだった。

だからこそ、教師として最大最強の好敵手ライバルであった殺せんせーの事を聞くのを楽しんでくれた。

「弱さ」を悔いた學峯と、「強さ」を悔いた死神。

原点は正反対なれど、似た者同士の2人。

學峯もまた、殺せんせーと接した事で成長した1人なのだ。

E組在籍時の最初の頃の渚にとって、あれほど恐怖の対象だったのに、今では殺せんせーと同じくらい尊敬している教育者だ。

渚と芸能界を引退したあかりは同棲を始めていた。

それまで住んでいた場所を引き払い、2人で住むには不自由ない賃貸マンションを借りた。

今まで時間が合わず、2人きりの時間が中々取れなかった2人だったが、今は家でも職場でも一緒なので、今までを取り戻すかの様に、甘い生活を送っていた。

無論、TPOは弁えているので、塾の生徒たちの前では普通に接しているが、2人きりになるとソーマチンやルグズナム級の甘さになっていた。

最も夜の生活においては、完全に渚主導で営まれている。

初体験の時は共に初々しかったが、数をこなしていくと力関係がはつきりとしていった。

渚は普段は超草食男子だが、事に至れば肉食に変貌する。

故にベッドの中では完全にあかりは翻弄され、渚の良い様にされてしまうのだった。

★★★

暗い闇の中。

僕の前で激しい戦いが繰り広げられていた。

触手を持つ2人の怪物。

1人は禍々しい姿を持つ死神。

1人は親しみ易い外見を持つ…僕らにとって最高の先生。
怪物としての能力は死神の方が上だった。

それに対し先生は、経験の差で対抗していた。

そんな中、1人の少女が間に入ってきた。

…茅野カエデ。

僕が最も親しくしている女の子。

先生の為に時間を稼ぐ為、かつて触手持っていた影響で残っていた
動体視力を武器に死神に挑んで…その胸を貫かれた！

ある日の深夜。

眠っていた渚はいきなり起き上がった。

「…はあはあ…」

汗を大量に流し、息が上がっていた。

目が覚めた渚は自分のすぐ横に視線を向けた。

「…どうしたの…渚？」

渚が突然起き上がった為、目が覚めたのだろう。

あかりが目をこすりながら、渚を見上げている。

渚はそのまま、あかりの胸に顔を埋めた。

「ちよつ…な…渚!」

いきなりの事にあかりは動揺するも渚が震えている事に気付いた。

「…良かった…茅野の胸…穴開いてない…」

渚が久しぶりに自分の事を本名ではなく、昔の偽名の方で呼んだ事
と、胸に穴と聞き、当時の事が思い出された。

「…渚…」

「ごめん…あかり…夢を見たんだ…」

それは殺せんせーと最後に顔を合わせた夜。

襲撃してきた柳沢と『二代目』死神に対し、足手纏いになるE組生
徒たち。

そんな中、殺せんせーが回復する為の時間稼ぎをしようとした茅野
は、無常にも死神の触手に胸部を貫かれ、重傷を負った。

渚は、傷ついた茅野を抱き抱え、殺せんせーの邪魔にならない様に退避する事しか出来なかった。

最終的には殺せんせーの最高の医術によって、茅野は一命を取り留めた。

でも、この件に関しては……渚は無力だった。

「……………」

あかりは自分のささやかな胸の中で震えている渚の頭を優しく抱きしめた。

結局、あの時の自分の行為は渚に辛い思いばかりさせている。

茅野カエデとして渚たちと過した9ヶ月間を演技と言いつつ切った。

それは、殺せんせーに対する憎しみによって紡がれた半分本当で半分嘘。

渚を自分を隠し脇役に徹する為の『主役』として利用しようとしたが、共に過している内に自分でも気付かないうちに好意を持ち、渚やE組のみんなと過した時間は楽しかった事は事実だ。

でも、触手に宿った殺意がその事を強制的に捨てさせ、演技と言いつつ放ち、渚の心を傷付けた。

それでも渚は、自分の演技という言葉を否定し、自分を救ってくれた。

自分の行動でクラスの皆が真実を知り、あの楽しい時間を失わせてしまった罪悪感。

その為に殺せんせーを守ろうとして……殺せんせーや渚を悲しませる結果となってしまうた。

あれから10年の歳月が流れ、婚約した今になって、夢であの時の事を見た渚は、こんなにも恐れている。

申し訳なささと罪悪感が沸き起こるが、それでも不謹慎ながら、僅かに喜びを感じている。

あかりを喪う事をこんなに恐れるほど、渚はあかりを想ってくれている。

その事実が嬉しかった。

「渚。私はもう貴方にそんな思いさせないよ。それを感じて……」

あかりはそう言うのと渚をベッドに押し倒す。

普段は渚主導だが、今回は珍しくあかりの方が主導権をとった。

悪夢を見て、不安になる渚を慰めるように優しく愛撫していった。

「…あかり！」

「わきやー!!」

最もそれも長く持たず、覚醒した蛇なぎへが主導権を取り戻し、小兔あかりを美味しく戴いてしまう結果となるのはお約束であった。

「…明日——いや、もう今日だね——は休みだし、このまま朝まで…ね」

何気にベッドヤクザな渚に戦慄する。

「あ…朝まで!?…許してつかあさい、許してつかあさい…」

☆☆☆

渚とあかりが浅野塾に就職してから一年が過ぎ、2人はめでたく籍を入れ結婚した。

そして本日、挙式を挙げる。

仲人に2人の共通の上司である浅野學峯塾長とその妻が勤め、新郎側出席者に親族の他に元・E組関係者から、親友である赤羽業カルマ、杉野友人、神崎有希子、クラス委員を勤めた磯貝悠馬と片岡メグ、(表向き)担任だった烏間惟臣とその妻の烏間イリーナ、新婦側はあかりが所属していた芸能事務所の関係者や、雪村製薬の重役たちが参列した。

控え室にはウェディングドレスを身に纏ったあかりの姿があり、その美しさに新郎と友人たちを魅了していた。

「渚君、茅野さん。結婚おめでとう」

「まさか、アンタ達が真っ先にくつつくとはね」

副担任だった烏間とイリーナが2人に祝福の言葉を掛ける。

渚の鈍感ぶりに、中々進展しないと思っていたイリーナが茶化すが、夫にこづかれ黙る。

「渚、茅野ちゃんおめでとう！」

「ありがとうカルマ」

渚にとってカルマはかつての憧れの存在であり、一度意見の違いか

ら対立し大喧嘩したが、それまで付き合いが長いのに互いに君付けして、ゲスト扱いしていた関係から進み、最も深く理解し合っている親友である。

今も潰れると記憶を無くす渚に愚痴る為に時々会って共に飲んでいる。

「でも誓いのキスの時、こうならない様に気をつけてね」

と、いつてスマホから一枚の画像データを見せる。

そこには暴走した茅野を抑える為にディープキスをする渚の姿が…。

「まだその画像持っていたの!?!」

「そりゃ消すわけないでしょ」

カルマにとって渚は、最も大切な親友であると同時に、ストレス発散の為に弄り倒せる玩具という側面は変わっていない。

「渚、おめでとう!」

「ありがとう杉野」

渚にとって杉野はカルマと同じくらいの親友である。

E組の時は、共に行動する回数は実はカルマよりも多かった。

「ああ俺も早く神崎さんと……」私がどうしたの杉野君「いや、なんでもないよ」

(…相変わらず杉野の恋は前途多難だね…)

神崎に片思いしている杉野は、プロ野球選手という多忙さの中で、それなりにアプローチしているのだが、当の神崎本人にはまったく気付かれていないという、皆の涙を誘う状況である。

「渚君、茅野さん。結婚おめでとう。お幸せにね」

「ありがとう神崎さん」

2人に祝福の言葉を掛ける神崎。

杉野にアプローチされている神崎本人は、実は渚に好意を持っていた。

きっかけは、鷹岡との一件である。

神崎を殴った鷹岡を倒した渚に感謝と共に好意を抱き、それが無く

ても機微を察する渚は神崎にとって心地よい存在だった。

しかし、修学旅行の一件から親しくなった茅野の思いを知り、まだ明確なLOVEになっていなかった想いを抑える事を選んだ。

「おめでとう渚、茅野」

「渚君も茅野さんも幸せにね」

クラス委員長だった磯貝と片岡も祝福する。

「ありがとう。2人も婚約したんだよね」

「中学の頃からお似合いだったものね」

「まあ、此処まで来るのに苦労したけどね」

この2人、高校時代本人たちとは関係ない所で、ロミジュリ状態になり、なかなか2人で会う機会が無くなり、しかも大学のサークルでも色々と難儀な事が起こり、就職してから漸く落ち着いたという経緯があった。

そして、準備の為に皆が去った後、唯一残った母と姉の遺影を持つ父の姿があった。

「…本当に綺麗だよあかり。母さんにも負けなくらいだ」

「…ありがとうお父さん」

「…渚君は本当にいい人だ。父さんではきつと、あかりにあれほどいい人を見つucker事は出来なかったよ」

外見は頼りないが、その小さな体とは思えないほど行動力があり、度胸もある。

教育という仕事に全身全霊を向けるその姿は、亡き長女を思い起こさせる。

浅野塾でも彼の教師ぶりは、生徒と保護者からも評判であり、學峯1人で手が回らない事もきつちりと補われている。

「うん。正直に言えば渚は私なんかにはもつたいたい…と思う」

「いや、お前も私の自慢の娘だよ…：最も仕事ばかりであんまり父親らしい事は出来なかったけどな」

「…そんな事ないよ。もし自分の会社の社員たちをぞんざいに扱って

いたら、そっちの方が軽蔑したよ」

「ありがとう。私が望むのはお前があぐりの分まで幸せになる事だけだ。雪村製薬の事は考えなくてもいい。渚君と幸せになる事だけを考えてくれればいい」

一度、経営不振に陥った事で、雪村製薬の重役たちも意識も変わり向上していった。

「会社ウチの事は心配いらぬ。もうお前に心労と苦勞をかけさせる事はない」

だから……。

「幸せになりなさい。あかり」

「…はい」

挙式はキリスト教式をベースとした人前式で行われた。

渚もあかりも、宗教にこだわりはないし、神仏ではなく自分たちを支えてくれた皆に誓いたいと考えたからだ。

進行は形式に囚われない自由さが年配のゲストにも配慮されたプランニングだった。

それでもキリスト教式をベースにしたのは、信徒ではなくともウェディングドレスを来て、バージンロードを歩くというのは女の子なら叶えたい夢だろう。

さて、挙式に参加していないE組メンバーたちはどうしているのか？

皆は誰一人欠ける事なく旧校舎集まり、飾りつけなど色々と準備をしていた。

渚とあかりはE組生徒たちの中で一番最初に結婚した。

それもクラスメート同士というオマケつき。

なので、E組初の結婚という事で、二次会はこの旧校舎でやる事に決定した。

色々な準備の手配をしてくれたのは、烏間の部下でありE組の面々とも関わりが深い鶴田と鵜飼夫妻である。

鵜飼健一と園川雀は特務部が解散し、統合情報部に移動時から交際を始め、一年後に結婚しており、その時はE組生徒たちに祝福されていた。

料理は村松や原が担当しているが、応援として渚の行きつけの居酒屋を経営する母娘も協力している。

娘の方の容姿を見た時、皆が変な声を出して驚いたのは必然だった
が…。

「渚、茅野ちゃん！結婚おめでとー!!」

挙式を終え、烏間夫妻とカルマたちを伴って到着した2人を喝采しながら向かえる。

すでにあかりは「潮田あかり」なのだが、そもそも渚以外は皆、E組在籍時の偽名「茅野カエデ」で呼んでいるので、結婚しても呼び名は変わっていない。

あかりもそれでいいと思っている。

もう1人の自分である「茅野カエデ」は、皆から呼ばれる事で何時までも存在できるのだから…。

「さて、渚と茅野ちゃんの次に結婚するのは誰かな？」

現在、メンバー同士で結婚の予定があるは磯貝悠馬と片岡メグ、千葉龍之介と速水凜香である。

中学の頃は、他にもくつつく可能性のあるメンバーは何人もいたが、それぞれ仕事が忙しく、そこまで進んでいない。

「私と悠馬君は婚約しているけど、籍を入れるのはもう少し先ね。悠馬君の弟さん妹さんたちが自立できるまではね」

磯貝が一流商社に就職し、経済的にもだいぶ潤ってきているが、弟妹が無事に大学を卒業するまで、結婚しないらしく、片岡もそれに同意し、待っているようだ。

「そういえば千葉君と速水さんも婚約しているよね」

「ああ。だけど結婚は立ち上げた事務所が軌道に乗ってからになるな」

千葉はその目が隠れる頭髪が原因なのか、就職活動に躓いてしまったが、交際を続けていた速水の勧めで起業し「千葉龍之介設計事務所」を設立、千葉が所長、速水が事務と営業を担当していた。

物静かでクール、あまり言葉で語らず、結果で示す仕事人という速水だったが、アルバイトの接客技術を身につけ、苦手だった対人スキルを身につけ、千葉をサポートし続けている。

速水の現状は、あかりが目指すモノに近く、色々と見習うべく、時折会って観察していた。

「渚も早く理事長から塾経営のノウハウをマスターして、この校舎を使える様になってくれよ」

「ああ。俺たち全員が渚の塾のスポンサーだからな」

渚にこの校舎を使わせたいというあかりの願いは、皆に了承されている。

皆としても、この校舎の有効活用を考えており、渚が自分達の後輩を育てるとするのは喜ばしいと感じていた。

いつの間にか、渚とあかりの夢は、元・E組全員の夢になっていた。

「皆、ありがとう」

あの教室を卒業し、皆がそれぞれの道を歩んでいるが、皆は決してバラバラになっていない。

渚とあかりの夢を基準にこれからもその絆は続いていくのだ。

潮田あかりのその後

渚との結婚式から1年以上が過ぎた。

これまでの渚との生活は幸せだった。

結婚しても、私は浅野塾の事務員を続けていたから、職場でも家でもほとんど一緒にいる。

普通、夫婦でもここまで一緒だったらマンネリになる…。

以前、私が出演したドラマもそういうストーリーだった——そのドラマは主演作品じゃないから私が演じた役ではないけど。

でも、私たちはそういう状態にはなっておらず俗に言う万年新婚カップル状態だ。

それに2人で同じ夢を目指しているし、夜のベッドの中は別にして普通段の渚は超草食男子である為、浮気するそぶりも見せない。

まあ、相変わらず低身長童顔の美青年だから、生徒達のお母さん達に好意を抱かれているが、中学の時の様に小動物扱いされているだけだからある意味安心なのもある。

今、私は浅野塾を休職中である。

その理由は…この膨らんだお腹にある。

そう、私は今妊娠している為、産休を取っているのだ。

結婚して半年くらい過ぎた頃、私は自分が妊娠しているのを知った。

その事を報告した時の渚の喜びようは今でも目に浮かぶ。

出産予定日6週間前に産休を取り、現在は予定2週間前だ。

それまでは、家でも職場でも渚と一緒にだったから、今は1人で留守番しているので少し寂しい。

でも、その代わりお義母さんがよく家に来てくれる様になった。

私がお義母さんを始めて見たのは、渚を本校舎に復帰させる為にE組を訪れた時だった。

あの時、鳥間先生に扮した殺せんせーに、渚に対する母親としての

態度の誤りと愚かしさを指摘され逆上し、ヒステリックになっていた。

触手の痛みを耐えていた時だったけどあの時、お義母さんに対する私の印象は、身勝手に最低な母親…だった。

でも、文化祭の時に訪ねてきた時のお義母さんはすっかりと角が取れていた。

渚の話では、中学卒業後にお父さんと復縁し、その後はすっかりとヒステリーは鳴りを潜めていたとの事だ。

きつと、自分が望む進路に進めなかつたから、子供にはその苦勞をさせたくないという思いが歪んでいって、あんなっちゃっただけなんだった。

今なら私もそう確信してる。

結婚してからのお義母さんとはよくドラマである嫁姑の争いなんて起こっておらず、私によくしてくれる。

妊娠中である私の面倒をよく見てくれる優しい人だ。

これからお義母さんとは良好な関係が続けたいな。

子供が生まれた。

女の子だ。

お義母さんが言うには、赤ん坊の頃の渚とそっくりだと言う。私もそう思う。

間違いない渚の子だつて一目でわかるほどよく似ていた。

まあ、私は渚としか経験ないし、渚以外とは死んでも御免だから当然といえば当然なんだけど。

私に似ている所は、黒髪である事と目元くらいかな。

ちなみに名前は「あぐり」

お姉ちゃんの名前をもらった。

25歳の若さで逝っちゃったお姉ちゃん分まで幸せになって欲しいから…渚がそう言つてこの名前に決めた時、嬉しくて嬉しくて泣いちゃった。

産休と育休が終わり、私は浅野塾の事務に復帰した。

休んでいた分のちよつと鈍っていたけど、すぐに勘を取り戻した。しばらくすると磯貝君と片岡さん、千葉君と速水さんも結婚した。前原君もとうとう年貢の納め時か、岡野さんと結婚したし、他の人たちもE組メンバーが相手じゃないけど、ちらほらと結婚した。

奥田まなみちゃんは竹林君と共同で研究していた人工血液をとうとう完成させ、カルマ君と結婚した。

カルマ君は、経済産業省での派閥争いで一時窮地に立たされたみたいだけど、持ち前の悪魔的頭脳と暗殺教室で培った経験を使い、見事に窮地を脱し、省内での地位を不動のモノにした。

杉野は……まだ報われていない。

神崎さん……ちつとも杉野の気持ちに気付かない。

男運が悪すぎたからかな？

そして幾年もすぎ、とうとう私たちは夢を叶えた。

浅野塾を退職し、あの旧校舎で新しい私塾を開いたのだ。

最も手入れをしていたとはいえ、流石に古い校舎なので、補強工事をしなければならなかったけど、千葉君のコネを使って安上がりで済んだ。

塾の開業資金は、E組の皆からの寄付と、今までほとんど手を付けていなかった私が女優時代に稼いだ貯金と、浅野塾長がくれた膨大な退職金からだ。

「教育には金が掛かるから遠慮しないで受け取りなさい」

それどころか、浅野塾と提携を結んでもらい、これからも力になってくれるという。

本当に中学時代のイメージと全然違うなあ。

流石に私たちは浅野塾長の様な完璧超人じゃないから、2人だけで

運営するのは無理だ。

だから渚以外の講師を数人、私以外の事務員を数人雇った。

その中に、わかばパークで知り合った鬼屋敷さくらちゃんもいた。

さくらちゃんも渚同様、教師になっていたんだけど、渚とはまだ交流があつたらしく、この塾の講師になってくれた。

再会した時はちよつと恨み言を言われたな。

さくらちゃんの好みは童顔低身長之年上らしく「渚は、私の彼氏になつてもらう予定だったのに…」渚が私に取られたからちよつとも彼氏が出来ないつて…。

大丈夫だよさくらちゃん…きつといつか渚みたいな年上がきつと見つかる…かな？

そういえば第一期生徒の中に、鳥間先生の娘さんが入塾してきたな。

ビッチ先生にそっくりで、塾の男の子たちを侍らせて逆ハーレムを築いていたけど、本人は自分にちよつとも靡かない寡黙な男子生徒が気になっていよう、何かとアプローチしてるけど、ちよつとも相手にされなくて、いつの間にか本気で好きになつたつて相談受けたけど…これビッチ先生と同じパターンじゃん。

血は争えないな…。

塾の経営は何かと大変だけど、浅野先生や元・E組の皆が何かとサポートしてくれる。

時には失敗もするけど、順風満帆だ。

娘のあぐりもすくすくと成長している。

外見は渚の女の子版なんだけど、技能は私に似たらしく、かつての私と同じく子役をやっている。

事務所も私が所属していた所で、今度こそ大女優にするつて所長も息巻いてたつて…。

今日の授業が終わり、職員たちも帰宅し渚と2人残っている。

「渚……。渚はもう立派に殺せんせーの様な教師せんせいになったね」

「いや、まだまだだよ。だって、僕はこれからも教師として成長するんだから……」

そうだね。

超生物のような事は出来ないけど、教師せんせいとしてなら殺せんせー以上の教師に成長できる。

私もそんな渚と一緒に進む為に成長し続ける。

「渚、一生、一緒に成長しようね」